



Title	野外見学会
Author(s)	間野, 勉
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 21-24
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91579
Type	report
File Information	fieldtrip.pdf



[Instructions for use](#)

Field Trip to the Great Dismal Swamp Wildlife Refuge

野外見学会



ヴァージニア州グレイト・ディスマル・スワンプ
野生生物保護区入口にある看板。

間 野 勉



会議3日目の2月23日曜日に、会議場のあるウィリアムズバーグから南に約70kmのグレイト・ディスマル・スワンプ国立野生生物保護区への野外見学会があり参加した。国立野生生物保護区 (National Wildlife Refuge) は合衆国魚類野生生物局 (U. S. Fish and Wildlife Service) が管理している。保護区内では、自動車による入構や、キャンプ、中心部にあるダーモンド湖以外での釣りなどは禁止されている。ヴァージニアとノースカロライナの二州にまたがるグレイト・ディスマル・スワンプ野生生物保護区は周辺を農地に囲まれており、面積がおよそ41,000ヘクタール、多くの珍しい生物群集が近年まで良く保存されてきたために、1971年に野生生物保護区に指定された。

当日は、二月というのにまるで北海道の四月のような陽気の良い天気の日であった。最初に案内されたのはその名の通り湿潤な地域にある、ガム (*Nyssa sylvatica*)、ヤチナラ (*Quercus spp.*)、カエデ類などの落葉広葉樹林で、シロオジカの姿も時々見られ、林道脇にある流れにはビーバーの掘り跡があった。平坦な林床には、上木の稚樹の他にはラズベリーの仲間の低木や、日本のササに似たスイッチ・キーン (*Arundinaria spp.*) という植物がまばらにみられ、非常にすいていて奥まで見通すことができる。本州から参加した野生動物保護管理事務所の羽澄さんに、「まるで日本の関東地方の雑木林のようですね。」と話しかけたら、「その通りだ、よく似ている。」との返事。春にはこのササモドキの新芽が、また夏から秋にかけてはベリー類がクロクマの食物になるという。



スイッチキーン (スズタケの一種) のブッシュの中のクロクマ。ヴァージニア州グレイト・ディスマル・スワンプ野生生物保護区にて。(ヴァージニア州陸水鳥獣魚類委員会、マイク氏提供)

ここでは、ヴァージニア州の鳥獣陸水漁業委員会と合衆国鳥獣魚類局が共同でアメリカクロクマの生態調査を1984年から3カ年計画で行なっている。興味深いことに、ここに生息しているクロクマのなかには、冬季にも冬眠せず活動しているものがある。これまでテレメーターを装着した個体9頭のうち、4頭が冬季にも活動していたようだ。これらの個体は、より水はけのよい砂地にあるマツやタイセイヨウスギ (*Chamaecyparis thyoides*) の針葉樹林のなかにパッチ状に生えているインクベリー (*Ilex spp.*) の群落で、冬でもしなびて残っている液果を採食するという。そのうちの1頭を2月の初めに捕獲し、血清を調べたところ、生理状態は冬眠状態にないことがわかった。クロクマやヒグマには、冬眠中代謝を下げる特殊な生理機構があることが知られている。しかしこの機構は、北海道のクマ牧場で飼育され

ているヒグマが冬眠しないように、環境条件によっては完全に働かないこともある。冬季の気候が温暖で積雪も殆どなく、冬季にも多様な食物があるという生息環境によって、ここに生息するクロクマの冬季間に活動するといった特徴的な生態がもたらされていると考えられる。

40人ほどの参加者は二手に別れ、バスに分乗して保護区の研究員の案内で、見学をしてまわった。さすがに2年間テレメでクマの追跡をしてきただけあって、冬眠穴も沢山知っており、二箇所の樹洞と一箇所の土穴に案内された。それらは全て林道から100メートル位の所にあった。林内を見学するためにバスから降りて林のなかを歩いた。ほ

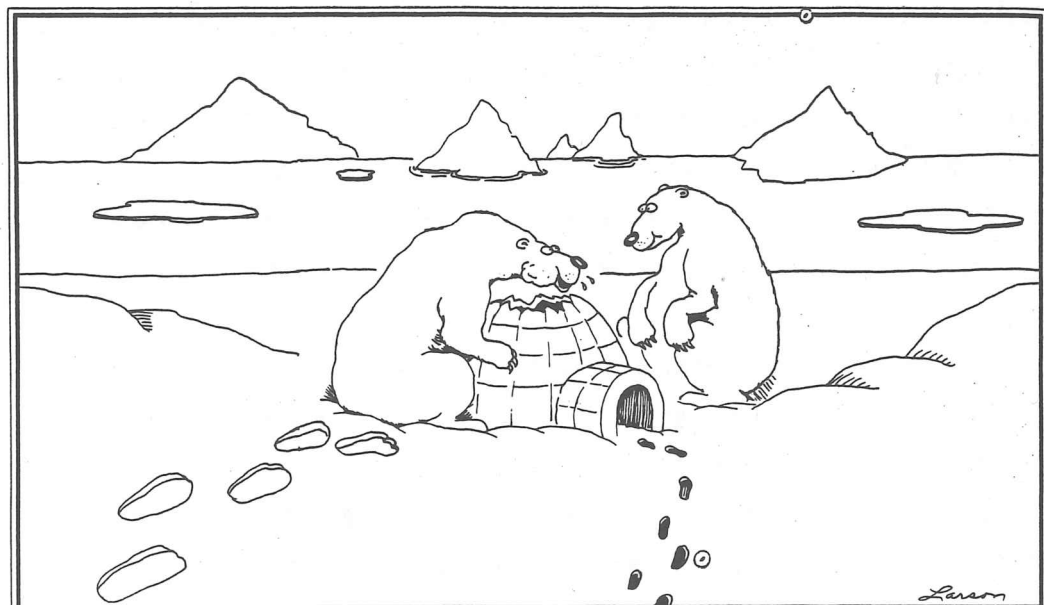


クロクマの冬眠穴。ヴァージニア州グレイト・ディ
スマル・スワンプ野生生物保護区にて。

とんど平坦で、または林床もすいているところが多く、調査はやり易そうだ。周辺部が農地で囲まれているだけあって、保護区のクマによる農作物の被害も発生している。ある流れのほとりで見つけた昨秋のクマの糞には、ナラのドングリとともに落花生の殻が入っていて、「保護区にはピーナツの木が自生するのか。」と思わず聞いたところ、「いや、周辺の農園が被害を受けるのだ。」と笑いながら係員が教えてくれた。残念ながら被害防止の対策や、補償問題については聞き漏らした。彼らは森林の生態についても詳しく、山火事跡地に案内されたときには、植生遷移について説明してくれた。あちこちに未だ焼け焦げた根茎が残るなか、樹高約3メートルのカエデやマツが生育していて、山火事後4年ぐらい経っている。あと75年もするとタイセイヨウスギの純林になるそうだ。テレメによるデータを集めて、クロクマによる生息環境の利用について知り、今後の保護区の森林の取り扱いについても反映させてゆく予定だという。

見学会に参加したメンバーは和気あいあいとして、まるでピクニックにでも来ているようであった。落ち葉を踏みしめて歩きながら、ウエストヴァージニア大学の大学院生と話をした。彼は、アパラチア山脈のフィールドで州の研究者とともに、テレメを用いたクロクマの生息地利用についての研究をしている。落花生の殻の入った糞を見て、アメリカでもクマの被害のあることを知った私は、「一般のアメリカ人はクマについてどのように考えているのか。」と彼に聞いてみた。意外なことに、おとなしいと言われるクロクマでさえ、猛獣として恐れられており、徹底的な駆除を叫ぶ市民も多いとのことであった。私が、「北海道のヒグマも同じだよ。」と話すと彼は、「この人間の誤解を解かなければならない。」と語った。さらに私が「君はクマというものをどのように捉えているのか。」と質問したところ、「多

くの場合は問題ない。しかし気紛れだから、時として非常に危険な獣であることもまた確かだ。人間はそのような相手として認めた上で、つきあうべきだと思う。」と明快な答が返ってきた。それぞれが対象としているクマについて話し合った。彼は、クマの保護管理を主張することが、アメリカの一般社会においてすら、まだまだ受け入れられていないことを強調した。そして、「そうだからこそやりがいがあるのだ。」と笑った。かれの熱意のこもった力強い態度に私は圧倒されると同時に、このような研究者の卵が沢山いるアメリカのクマの将来と、日本の将来とを思わず比較対比し、少し考えてしまった。。。。。。。



"Oh hey! I just love these things! ... Crunchy on the outside and a chewy center!"